

米山梅吉記念館 館報

2012
(平成24年)

秋

Vol. 20



「尤も地震も其の当時は未曾有の出来事として種々悲惨な有様を目の前にまざ々と見ました為め、一般に同情心又は犠牲的精神を呼び起こしまして、各人共に大いに悔悟したこともあり、又は奮発したこともあつて、之から後は斯くあるべし、斯くすべしと云ふ色々の決心を起こしたので、この当時の気分さへ其の通りに永続すれば、社会は完全なものとなるであらうとさへ思はれましたが、人間の愚か我儘勝手な為め、時がたつに従つて、何時の間にか当時の感じが段々消えて行きつゝあるのは如何にも残念なことでありますが、少くともこの地震に就いて、人間の事は朝に夕に測り難いと云ふ非常な苦験が、会ま信託の必要を認めさせましたことは争はれない事実であります。」(大正15年4月17日米山信託協会会長ラジオ放送より)

かねてより、アメリカでの信託業の状況を観察し、日本での必要性も感じていた米山は、大正11年秋、信託会社創立を決意して、12年初めに設立趣意書をつくった。この設立趣意書に「信託会社ノ経営ヲ促進シテ事業ノ発達ニ一新紀元ヲ劃スルヲ得ントス」とあるように、ライバル会社からも役員を入れ、三井の枠に止まらず、日本に信託業を根付かせようとする、並々ならぬ決意が感じられる。

いざ会社設立の発表というその時、関東大震災が発生した。しかし、震災による事例を見聞きし、より一層信託の必要性を痛感し、設立に奔走した。そして大正13年3月25日、三井信託株式会社が成立した。信託会社は、個人的な管財管理はもちろんのこと、社債の発行等により資本主義の発展も見込め、経済の活性化に大いに貢献した。

信託には、私益信託と公益信託がある。個人の資産管理と、慈善・学業等公共の利益を目的とする事業は、社会に有益な事業資金の提供、という意味ではどちらも大差はなく、人を信じて依頼し、よりよい社会の構築を目指すものである。

かつて、大事な外交の場で「Trust me」と宣った政治家もいた。

「富んで財産を持つて居ると云ふばかりでは其人は偉いとは誉めることは出来ない。其の処置が立派に出来る人こそ偉いのであると、以て考ふべきことであります。」(同前)



公益財団法人 米山梅吉記念館



館報第20号発行に際して

理事長 渡 邊 脩 助

全国のロータリアンの皆様、暑中お見舞い申し上げます。

梅雨が明けても鬱陶しい日々が続きましたが、九州・四国地方の大雨、洪水による被害、7月末からの猛暑は凄まじく、多くの熱中症が発症しました。この異常気象現象は地球温暖化によるものでしょうか。北極の氷河溶解、二酸化炭素の排出、森林の伐採等々による地球環境の破壊に起因するものでありましょう。

米山記念館の運営にご協力いただいております全国のロータリアンに心から感謝申し上げます。

7月13日、岩手県紫波町より6名様が来館されました。三井報恩会が援助した町の記録を一冊にまとめた本の完成を記念して、作成にあたった町立公民館の関係者とのことでした。昭和9(1934)年、三井報恩会が創立されました。その目的は、社会・文化全般にわたり、それぞれの事業を支えることでありました。その活動は、医療・福祉、学術研究・実験助成、農村振興等と多岐にわたりました。農村振興事業において、青森県東津軽郡西平内村と岩手県紫波郡彦部村が特定振興村に指定されました。彦部村では物心両面から更生指導がおこなわれ、その内容は、館報Vol.18に掲載された『セピア色の彦部一写真で見る彦部地区のあゆみ』に見ることが出来ます。今度は、長澤聖浩氏によって編纂された『三井報恩会と岩手県彦部村』の記念館への寄贈のための来館でした。

本著は、三井報恩会が岩手県彦部村での農村振興事業の実績や思い出を詳しくまとめたものであり、報恩会が果たして来られた社会貢献活動をはじめ、当時の農業経済情勢や農村背景を深く知ることが出来る著書であります。

三井報恩会が創立された時代背景には、昭和恐慌の影響に加え、東北地方の大冷害や生糸、米穀相場が暴落するなど不況が深刻化し、批判の矛先

は財閥に向けられ、政党や三井・三菱・住友の各財閥トップの要人がテロの標的とされました。そのような情勢の中、昭和7(1932)年、三井合名理事長・団琢磨が血盟団によって暗殺されるという衝撃的な事件が起り、これによって三井を取りまく状況は一変しました。団氏の暗殺後、三井合名の理事長に就任した池田成彬は、三井財閥に対する社会的批判を沈静化するために社会への利益還元を推進し、「三井は儲けるべからず散ずべし」をモットーに掲げ、経営方針を大きく転換。3千万円(現在の貨幣価値にして数千億円余)という巨額の資金を寄付して昭和9(1934)年に「三井報恩会」という社会事業財団を設立し、初代理事長に日本初のロータリーの創始者であり、三井信託の初代社長である米山梅吉が就任しました。

当財団の助成事業は、昭和19年までの10年間に約3,900項目に達し、莫大な基金を元に公益活動を広げていきました。米山は助成事業の一つであるハンセン病施設を限なく慰問視察し、何時もポケットマネーで手土産を持参したとのことでした。彦部村視察の際にも村内を隅々まで歩き、小学校児童にはお菓子(ビスケット)を配るなど、その温かい人柄とロータリーの思いやりの心が感じられました。

今年度の国際ロータリーの会長は、30年ぶりに日本から田中作次氏が就任されました。「奉仕を通じて、平和を」のテーマのもと、我々にとりましては特別な年度であり、全面的に支援しなければなりません。またロータリーが発足時の基本理念を取り戻すよう、田中会長をバックアップしなければなりません。そして、2013年リスボン国際大会には、日本から大勢の仲間と参加しましょう。

当記念館は、全国のロータリアンのご寄附で設立された、日本ロータリー関係の唯一の施設です。是非一度はご訪問されることを願ってやみません。

春季例祭



来 賓

■日時 2012年4月28日(土)
■会場 財米山梅吉記念館ホール

●例祭及び墓参

●例祭 式典

●記念講演

演題 「日本政治の行方」

講師 島田敏男 氏

(NHK解説主幹)

●アトラクション

Natia(R財団山静学友)による歌唱

中橋有起・瀧口晶子(ソプラノ)

廣瀬美鈴(ピアノ)

●懇 親 会



島田敏男氏



華やかに…Natia

記 念
講 演

日本政治の行方

島 田 敏 男 (NHK解説主幹)



今日は個人の立場で、政治家や政党という存在に対し、率直に話してみたいと思います。

4月26日の小沢一郎さんに対する判決について、昔から親しい政治家で、法律家でもある民主党の江田五月さん(元参議院議長)がメールを送ってくれました。「東京地裁は予想通り無罪判決だった。しかし、検察の議決による強制起訴は有効であり、秘書等の政治資金規正法違反の事実と、その報告を受けて了承したことまで認定している。ただ共謀の疑いがあるが、小沢さん自身が違

法性の認識をしていたと認定できない。そここのところで有罪にできない。一言で言えばきわどい判決だ」との評価でした。野党は「昔で言う灰色高官の類ではないか」と政治倫理審査会での弁明、衆院予算委員会での証人喚問などを要求するでしょう。民主党は、これに応じることが出来るか、また小沢さんがどのように振る舞うかによって、今後の政局に一定の影響はありますが、小沢さんの力は、これ以上大きくならない縮小再生産過程に入っています。

このような状況の中で衆議院の解散・総選挙への道筋はどうなるか。3つ考えられます。

その①:話し合い解散

社会保障と税の一体改革関連法案の審議が進み、

衆議院で採決する前に野田総理と谷垣自民党総裁が手を握る。自民党は、民主党原案を削りながら譲歩をさせ、消費税率の引上げと社会保障の拡充の今後に向けての協力を約束し、解散・総選挙を話し合いの上で行う。これが一番の近道です。結論からいうと、このケースの可能性が最も高いと思われます。その②：内閣不信任決議案可決による解散

自民党から野田総理おろしの内閣不信任決議案が出され、小沢グループの衆院議員60～70名が離党覚悟で自民党と手を結び同調、という動きになるとする。本来、消費増税は自民党が言い出したことですが、民主党がガタガタだからという理由で内閣不信任案を出し、小沢グループと連動して可決することで野田内閣の総辞職または解散・総選挙に追い込む。しかし、このケースは可能性が少ないと思います。小沢さんは党の幹部でいることによって、政党助成金を思い通りに配ることができる。これが一番のパワーで、これがないと何の力ももてないのが現実です。おそらく小沢さんは、党内での復権を要求します。しかし野田さんはそれを認めず、小沢さんがついてもなくても社会保障と税の一体改革を推し進めようと腹を決めています。その間に立って右往左往しているのが興石幹事長です。

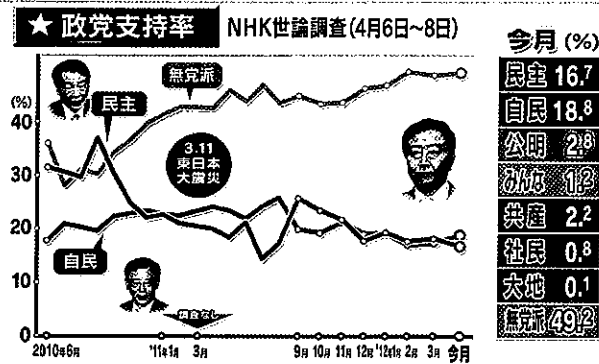
その③：来年夏の任期満了による解散

消費税率の引き上げは断念しないが、次の国会に回すという先送りを繰返し、任期満了で解散する。「世界の中で日本はそんな悠長なことでもいいのか」と、お感じの方も多いと思います。この問題は大きいですが、政権交代時代に入り、国民と政治家が共に試練に立たされている中で、こうした時間を使うことも政治意識の成熟に資する道程の一つではないかと思ひます。ただ、この場合は、今年9月に野田さんと谷垣さんの民主党代表、自民党総裁としての任期が切れ、再選されるかどうかで状況は変わってきます。

現時点では、基本的には、谷垣さんは相手に譲歩しながら、自民党が主張してきた消費税増税を実現させる。野田総理も国民にインチキマニフェストのお詫びをしかりとし、社会保障の新しい全体像を示した上で、解散に踏み切りたいと考えているのではないかと思います。増税の話は、一つの内閣で簡単にできる話ではなく、かなりの腕力がないとできません。かつての消費税導入の際も、4つ位の内閣

がつぶれました。野田さんは、谷垣さんとの距離の詰め方に細心の注意を払って進んでいる、と言うのが実態ではないかと思ひます。

さて、以下の表は、NHKが4月6日～8日に行った世論調査の結果です。野田内閣の支持率は60%台でスタートし、30%すれすれまで推移して来て底をついた感があります。衆参のねじれ状態のもとで消費税率の引き上げの大事業を行い、T P P（環太平洋パートナーシップ協定）にも手を広げようとしています。しかし同時並行は無謀に近いので、まず、消費税率の一点突破にとりかかろうとしています。



この時点で気に掛かる結果が出ています。今回、内閣の支持率と社会保障と税の一体改革の評価で、40～50代の働き盛りの世代の支持率と評価が、前の月より10ポイントほど下がりました。消費税率の引き上げばかりが先行して、社会保障の中身、将来への具体化が遅れるのではないかと、との懸念が40～50代の人達の中から色濃く出始めています。消費税率引き上げ反対の36%の人の半分近くが、行政改革や国会議員の定数削減が進んでいないことを理由にあげています。この怒りの声に答えるため、民主党は180の比例代表を80減らすと言ひ続けています。しかし、公明党を先頭に中小政党は猛反発しています。自民党は、最高裁から言われた違憲状態を解消すべく、小選挙区0増5減の定数は正だけを考へている状況です。①の話し合い解散でいく場合は、民主党も公明党と敵対関係になるのは避けたいので、80の議員削減案を下ろすことになるでしょう。いかに形を整えるか、大変難しいです。

政党支持率を見ると、民主党と自民党は2割にも満たない低い支持率で競い合い、無党派が最大の49%を占めています。この無党派層の中には、大阪維新の会に漠然と期待感を抱いている人も大勢いると思ひます。先日、大阪で「関西では、大阪維新の会が明日にでも天下をとるような記事が新聞の一面を飾っ

ていますが、全国的にどうですか」と聞かれましたので、「三面記事扱いです」と答えておきました。無党派層支持者が、橋下さんのような存在に期待するのは現実です。しかし、私は、橋下さんに高い点数はつけられません。言っていることが抽象的であり、憲法を改正すればなんでもできるとの持論で、そこに至るプロセスがない。相手によって言うことが違う。批判に批判を重ねるだけ。橋下大阪市長と石原東京都知事のアドバルーン合戦が、いつのまにかアドバルーン連合になり、尖閣諸島を買うための寄付金を大阪でも集めます、と発言しています。そのようなことだけで終始してしまうような気配です。財政上の問題、そして国民の一番期待の高い社会保障の問題について、地に足のついた提言を重ねていくということがなければ、民主党のマニフェストに騙されたことに気がついた日本国民には、もはや受け入れられないと思ひます。有権者が賢くなっていく、このことが重要です。

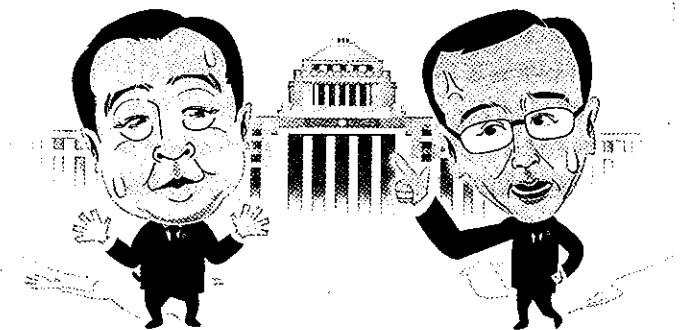
戦後民主主義者の代表格として知られる政治学者の丸山真男が、かつて民主主義の定義として「民主主義は終わりのない革命である」と言ひました。しかし、終わりがないので、みんな途中で飽きてしまう危険性がある。最善の結果が出ないことにしびれを切らせて、次善の結果を得る努力を怠ることが、民主主義の死を招くことになります。ヨーロッパの議会制民主主義の先進国でも、有権者が結果の出ないことに焦り、あらぬ投票行動に出て、国の方向を逆向きにさせたという例は、枚挙にいとまがありません。

政権交代は善であります。政権交代の繰返しの中で、より良いものを有権者がどう選んでいくか。このプロセスによりやく日本も入った。一度や二度騙されても仕方ありませんが、三度騙されるのは愚かなことです。ここが重要なポイントです。自民党も野党ですが、国の将来のためにこういう責任を果たした、ときちんと言へるようであればなりません。合意形成が政治家の仕事です。相手の頬をはりあう繰返しがあつて、その上で初めて合意が成り立つ。頑張ることは頑張った。しかし、ここで話をまとめるしかない。だからわかつてほしい。こういう政治の舞台での合意形成を見守る際には、有権者が正しい方向性を頭の中に置いておかないと、無為に時間が過ぎるだけになりかねません。そうした冷静な政治過程を現実のものにするために

は、民主党と自民党の政党支持率が、もう少し高い水準で競り合うような状況が必要ではないかと思ひます。

3.11は大変不幸な出来事でした。しかし、震災後、2030年のエネルギーのベストミックスという大きな課題を、皆が真面目に考へ始めました。この点だけはプラスの評価ができます。10年20年先を射程に入れた政治改革、そして社会の改革を考へる。これが今日一番重要なことです。

時流にのって一票投じるのでは、おまかせ政治と一緒にです。そうではない選択肢を地域、職場でみつけていけるか。みつける作業の中で次世代や地域を担う人材を探し出し、どう育てるか。これが一番大事だと思ひます。政権交代とは、あきらめることなく次善の姿を積み重ねていく試練です。そういう政治文化風土が日本全体に定着していけば、アジアの中でも、もう少し尊敬される日本になる。そういう国になることが、中国に対する最大のプレッシャーにもなります。皆様には、今後ともそれぞれのご活動を通じて、より良い国づくりに邁進していただけますよう心から祈念して、今日の話を終わりと致します。



追記 (2012年7月11日)

「国民の生活が第一」という名前の小沢新党が49人で旗揚げしました。民主・自民・公明の3党合意が実現したことに反発した行動ですが、4月に述べた通り、小沢氏が「縮小再生産過程」に入つたことを象徴していると思ひます。政治の動きは想定①②③のいずれもズバリ当たらないまま推移していますが、引き続き合意と対立と先送りの3つの要素が絡まり合った状況が続く点は変わらないと思ひます。

(島田拝)

アラン・シャンドの童子の墓



先年、中高年の山登りの会「沼津市五十雀山歩会」の人達と、箱根やすらぎの森を散策し、箱根町へ出た。その時、通りかかった萬福寺の山門傍らに、小さな自然石に刻まれた石碑が目に入った。そこにはアラン・シャンドの三歳の童子が病にかかり急逝し、この寺に埋葬されていると刻まれていた。

アラン・シャンドの名は大学時代「簿記、会計」で耳にした名前だと思い、家へ帰り調べてみて次のようなことを知った。

イギリス人アラン・シャンドは明治政府に招かれ、明治6年(1873)『銀行簿記精法』を刊行した。これにより、日本で初めて複式簿記が導入され、「シャンド式簿記」となり、広く企業会計の教典となった。『銀行簿記精法』を完成させたシャンド氏は、静養のため箱根に滞在したが、逗留中、双子の男女児のうち男の子モンテーギュが病にかかり、明治6年8月8日、ここ箱根の地で急逝した。氏は萬福寺境内に息子を埋葬し、墓のそばに一本の楓を植えた。



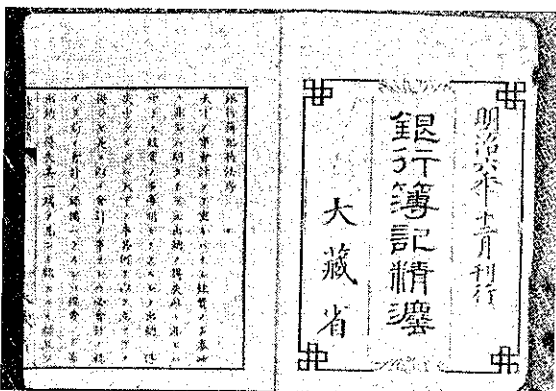
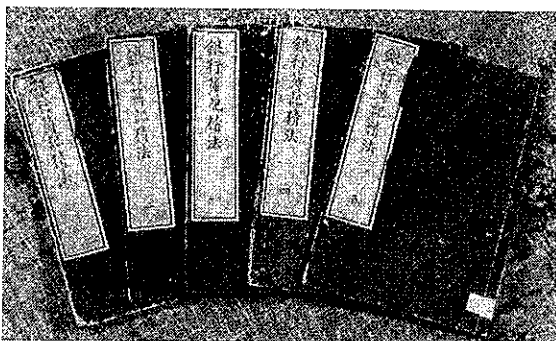
晩年のアラン・シャンド『わが国銀行史上の教師』より 蔵省の諮問に答え、ヨーロッパ主要諸国のような中央銀行(発券銀行と政府の銀行)創設の必要性を強調し、その後、日本銀行が設立された。

明治11年、シャンド氏は日本での役目を果たして

浜 悠 人

(沼津史談会副会長)

イギリスに帰国した。その後もバースバンクの重役として、日本の近代化に大きな役割を演じた。明治31年、三井銀行池田成彬、丹幸馬、米山梅吉の三人に、欧米視察の出張を命じた。その時、一行はロンドンに滞在中、シャンド氏の斡旋により、パース銀行の行員から、何回かの銀行外での特別レクチャーを受けたことが記録されている。



「銀行簿記精法」(同前)

後年、梅吉は自著の中でシャンド氏に触れ、「我邦銀行制度の発達を叙し来たれば、その創設に大関係あり大功労ある学者にして且つ実務家たる英人シャンド翁のあつて存するを忘るべからず」と述べている。梅吉は、帰国後もシャンド氏と文通を交わした模様である。大正12年の関東大震災で、箱根の萬福寺と童子の墓も被害を受けた。これを知った梅吉はお墓を修復し、写真にしてシャンド氏に送った、これに対し、80歳のシャンド氏は大変感謝し、鄭重な

礼状を寄せている。

一方、若い頃シャンド氏のお世話になり、後年、日銀総裁を務めた高橋是清は、日露戦争の際、戦費調達のための外債募集で、シャンド氏に一方ならぬ助力を受けたといわれる。そんな縁で是清ら当時の政財界の有志たちは、箱根の童子の墓の供養を続けていたが、昭和5年の北伊豆地震で、墓碑は土石流で埋没した。奇しくもシャンド氏は、同年4月、パークストンで86歳の生涯を閉じた。

先日、私は再度萬福寺を訪ねた。墓地の一隅に新たな顕彰碑が建てられ、次の文で結ばれていた。「昭和5年、北伊豆地震により童子の墓・寺ともに埋没し、爾来80年墓の再建はならなかった。氏は1930年、86歳で逝去、ロンドン郊外のブルックウッドの森に眠る、かかる近代日本の国造りの恩人アラン・シャンド氏の功績を忘れず、又これを次世紀に繋ぎ伝えるため有志・相語り童子の眠るこの静寂の地にこの碑を建立した。」



アラン・シャンド顕彰碑

アラン・シャンドと米山梅吉

アラン・シャンドは1844年英国の名家に生まれた。1872年、明治新政府は国立銀行条例を制定し、翌年シャンド氏をお雇い外国人として招聘した。そして、銀行制度、銀行の業務分担法、帳簿の整理など、銀行の金融諸制度の創設に当らせた。当時、大蔵省内では米国式を取り入れるべきか、英国式を取り入れるべきかの賛否があったが、シャンド氏の説得によ

り、英国式が採用された。これは、一般の銀行を商業預金銀行にすべきというシャンド氏の主張が取り入れられたものである。これにあたり、銀行簿記書を脱稿。これを翻訳し「銀行簿記精法」として刊行した。これは、わが国最初の複式簿記の原点で「シャンド式簿記」と称せられ、全銀行の統一経理基準となった。

当時の講習生には、第一銀行頭取の佐々木謙一郎・修二郎兄弟や梅浦精一、田口卯吉などもいた。田口は、その後もシャンド氏に教えを乞い、1879年、英国の経済雑誌『エコノミスト』を模範とした『東京経済雑誌』を発行し、自由主義の第一人者となった。高橋是清は、少年時代に英語を学ぶ為に、横浜のアラン・シャンドの家に住み込んだ。それ以来、シャンド氏との文通を欠かさず、公の場で自分がシャンド氏のボーイだったことを自慢していたという。この時代、日本の実業家や民間人でロンドンに行った多くの人が、シャンド氏を訪ねた。

シャンド氏は、1875年に三才の息子さんを亡くし、



箱根の萬福寺

箱根の萬福寺に埋葬した。そして、悲嘆にくれた夫人と共に英国に帰国してしまう。しかし、その後また銀行に勤め、五大銀行の取締役も務めた。

そんなシャンド氏と米山のつきあいは、明治31年、三井銀行を代表して池田成彰、丹幸馬、そして米山の若き3人のバンカーが、欧米の銀行業務の視察に行った時に始まった。彼らはロンドンに滞在中、実際の銀行で研修を行いたかったが、自行員以外の人を取引台にいれるという慣例がなく、現場に立ち会うことができなかった。そこで、いくつかの銀行で事務室を借り、質疑応答の形式で組織や営業の状態を聞いたり、紹介を得て手形交換所や英蘭銀行を見た。パースバンクの行員には、先方から足を運んでもらい、外国為替の事務や倉庫事業などを調べた。これは当時シャンド氏が、パースバンク・ロンバードストリートオフィスの支配人になっていたことで便宜が図られたものであるという。シャンド氏自身も、若い頃滞在した日本には親しみを持っており、帰国してから日本や日本人を懐かしがり、三井銀行のロンドン出張員らに思

い出話なども聞かせたらしい。アーネスト・サトウとは近所に住まい、お互いに日本での昔話に花を咲かせていた。

そんなシャンド氏を、米山は海外の友人として大切に思っていた。シャンド氏と米山は24歳の年の差があったが、仕事の師であると同時に、一人の人間として、また息子を若くして亡くした一人の父親としても、相通じるものを感じたのであろう。英国に行くたびにシャンド氏を訪ね、文通を続けていた。ある時は、自由党クラブに同行し、「グラットストーンが自分の宗教であり哲学である」という持論を聞いたり、マコーレーの『英国史』を熟読し、当時の世界大戦における諸問題を語るシャンド氏に、経済

Ardmore, Ardmore Road,
Parkstone, Dorset,
22nd November, 1925.

My dear Mr. Yoneyama,

It is indeed most difficult for me to express as I would wish the deep sense of gratitude I feel for the generous act of most eminent service you have rendered me and my family in having the tomb of my little son at Hakone restored after having been overthrown by the great earthquake. We shall never forget it, I also feel very grateful to your son for the photos he took and which with the other photographs you so kindly sent bring vividly before my mind scenes of long ago of the deepest interest to me. The little boy whose tomb you have so kindly restored was a beautiful boy and had a twin sister who is, I am happy to say, still living and in good health, I recollect that one day I went to visit Kido Koin at Kudan, where he lived and told him of the birth of the twins. He seemed much interested because he said it was very unusual in Japan to have twins born of different sexes.

In those far off days I knew some of the principals of your well known firm. The head was I think, Mitsui Hachiroemon, a very nice looking elderly gentleman, and Mitsui Gensemon and another Mitsui whose cognomen at the moment I cannot recall. The fly-wheel of the firm at that period was Minomura Risemon, whose son, Minomura Riske was then a young man. On one occasion, I took with me Mr. John Francis Campbell, who held a high position at the Court of Queen Victoria called "Gentleman in waiting". He was greatly interested in all he saw and I think mentioned this visit in a book he published called "My Circular notes". He is not alive now, but I think his sister is. She is the dowager Countess Granville, her husband having been Foreign Minister in the government of Mr. Gladstone. And when I sign this letter I shall use ink taken from an inkstand used by Mr. Gladstone from 1892 to 1894.

Tokio I presume is gradually emerging from its ruins, but the process is probably slow. My Bank--the Westminster--has been engaged in negotiating with the Financial Commissioner, Kengo Mori, for a large loan for Tokio, but circumstances in the Money markets of London and New York at present are unfavorable and its issue has had to be postponed. I offered to go to London to take some part in the discussions, but I was not required. In all these loans for Japan I have been a sort of connecting link between Japan and England.

I contemplate going soon to the continent for change of air and scene being not particularly well, although not at all seriously. I trust this will find you very well and also your wife and all your family.

Always, yours very sincerely,

A. ALLAN SHAND.

A. Allan Shand

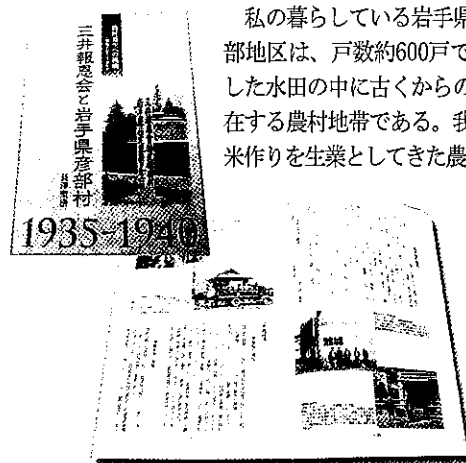
シャンド氏から米山に送られた礼状

人以上の人間性の大きさを実感している。シャンド氏も米山にはより親しみを感じていたようで、腕時計や、自分の意見を書き込んだヒンデンプルクの著書を送っている。

関東大震災の際、箱根の萬福寺にあるシャンド氏の息子さんの墓石が倒れたことを知った米山は、これを修復してその写真を送った。これまでのシャンド氏の日本における貢献と、その後も続いた日本人との温かい交流。米山の行動は、感謝と報恩からうまれた自然なものであった。またその行為に対して丁寧な礼状を送ったシャンド氏は、息子の眠る日本の土とそこに生きる人の思いに、あらためて心動かされたに違いない。

『三井報恩会と岩手県彦部村』出版について

紫波町文化財調査委員 長澤聖浩



私の暮らしている岩手県紫波町彦部地区は、戸数約600戸で、広々とした水田の中に古くからの農家が点在する農村地帯である。我家も代々米作りを生業としてきた農家である。

この彦部地区では住民の郷土史に対する関心が深く、平成18年度より紫波町彦部公民館では「彦部の歴史を深める会」という会を結成し、会員達がそれぞれ課題をもって地域の歴史について調査研究にあたっている。

その一環として平成23年に『セピア色の彦部』という写真集を編集出版した。これは彦部地区内の明治30年代から昭和40年代の古い写真を収集して、項目ごとに分類したものであった。

この際に、大正時代から昭和20年まで村長を務められた佐藤定八宅(屋号八龍)の古いアルバムから三井報恩会の更正事業の写真がまとまって見つかった。

三井報恩会による農村経済更正事業の事は、地域の先輩方から聞いて知ってはいいたものの、70年以上前の事なので、事業内容がどのようなものであったのか、詳しいことは分からなかった。また、発見した写真の中で村役場前で撮影された集合写真があったが、誰が来村された際の写真なのか記録がなく、これも分からずにいた。

ちょうどその時、資料調査に訪れた岩手県立図書館で、三井報恩会が昭和15年に発行した『特定振興村彦部村の実績』という本を偶然にも発見し、彦部村において三井報恩会が展開した事業の全貌を知ることができた。

また、村役場前の集合写真は、三井報恩会理事長の米山梅吉氏が来村された際のものであることも同時に判明した。

調べてみると、三井報恩会とは、昭和9年に三井財閥が設立した社会事業財団で、農村振興の分野で、東北地方より青森県東津軽郡西平内村(現在の平内町)と岩手県紫波郡彦部村(現在の紫波町彦部地区)の二ヶ村を指定しており、当時の理事長が米山梅吉氏であった。

そこで、内容の確認調査のために、平成23年2月16日に東京日本橋の三井報恩会と静岡県長泉町の米山梅吉記念館

を訪れた。

どちらの施設の方々も彦部に当時の写真などの写真がまとまって残されている事に驚かれ、私も当時の事業内容について彦部地区の原型が作られた一大事業であった事を再認識したのであった。

これをもとに、平成23年に発行した『セピア色の彦部』には経済更正指定村時代の事業写真を、続いて平成24年に発行した『彦部の歴史』には三井報恩会と彦部村について当時の事業内容、地区民の方々の回想録を出版した。

これらの内容について、多くの反響があり、写真と文章を一体化して一冊の冊子にしてはどうかとの話になり、更に詳しく調査する事となった。

調査の過程で紫波町教育委員会の資料室より当時の事業内容を綴った彦部村役場の資料が発見され、また、専任指導員であった星山の小野文眞氏宅から乳牛飼育に関わる資料が見つかった。

こうして次々と資料が発見されたのは、ただの偶然とは思えず、この機会に何としてもきちんとした形でまとめて後世に残しておきたいとの強い思いを抱いたのであった。

そしてこの度、多くの方々のご協力のおかげで、『三井報恩会と岩手県彦部村』という資料が完成した。

B5版約100頁で、前半が経済更正の事業内容、後半が当時を知る方々の回想録となっており、当時の事業写真50枚、当時の新聞報道記事等も掲載しており、貴重な記録資料となったと考えている。

この完成した資料の報告と御礼のために、平成24年7月13日に彦部公民館長をはじめとする彦部地区の代表者6名で、米山梅吉記念館と三井報恩会を表敬訪問した。

米山梅吉記念館では、渡邊理事長以下幹部の方々の歓迎を受け、完成した本を贈呈致し、米山先生の墓前でご報告申し上げたのであった。

70年以上を経てこうして再び繋がったご縁に不思議さを感じたが、これも米山先生のお導きであったかもしれないと感じている。

私達彦部地区民は、三井報恩会と米山梅吉氏より受けた恩恵を忘れず、末永く後世に残し伝えていかなければならないと思っている。



彦部公民館長ら一行の表敬訪問

「従吾会」という名称

井口賢明 (沼津北RC)

米山梅吉ら5人は、若いとき、従吾会という生涯の付き合いの会をつくった。この5人は、稲村真里、角田浩々歌客（勤一郎）、遅塚麗水（金太郎）、石川半山（安次郎）と米山である。

5人は、いずれも同年代である。米山が慶応4年2月生まれ、稲村が慶応3年12月、角田が明治2年9月、遅塚が慶応2年12月、石川が明治5年8月生まれである。

米山、稲村、角田は、沼津兵学校の流れをくむ沼津中学の同窓生である。遅塚は、幕臣の子で、まだ幼少であったが、明治維新の際、駿河に移住し、小諏訪村（現沼津市小諏訪）に住んだ。しかし、明治10年には一家をあげて上京したというから、米山、稲村、角田らと沼津での付き合いはないであろう。石川だけが岡山県で静岡県とは関係ない。



左から角田浩々 石川半山 米山 稲村真里 遅塚麗水

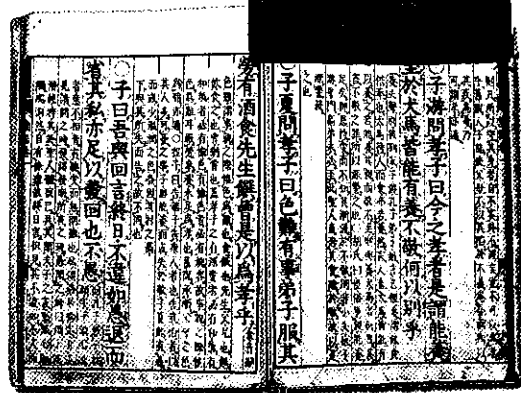
この従吾会がいつ組成されたかである。米山、稲村、角田、遅塚らは、明治20年の米山渡米の前から交流があった。しかし、米山と石川の交流は、米山がアメリカから帰ってきた後と考えられる。その意味で、米山の帰った後の明治28年10月以降と考えてよいであろう。

角田、遅塚、石川は、文筆を業としていた。米山も文筆を志したことがあったが、それでは食っていけないと実業の世界に入った。稲村は、教師、

後に神官となったが、歌集を出したりしている。若者の熱情で、話しがはずみ、自ずから文談に政談に侃々諤々、口角泡を飛ばし熱弁を戦わせたことであろう。これは、長じて、それぞれの社会的な立場を得た後まで続いた。まさに生涯の友であった。

従吾会という名称で、書物を出版したこともある。あるとき、稲村がこんなものを作ったといって、歌の原稿を見せた。これを出版することになり、角田が編集にとりかかったが、途中、大正5年3月亡くなった。これを遅塚が引継ぎ、大正6年1月『垂穂集』として出版した。これは、著者稲村真里 発行人遅塚金太郎 発行所従吾会となっている。出版費用は、当然に米山が負担した。

従吾会のことについては、『米山梅吉伝』のなかの稲村の「米山と余」に、記述されている。このなかで、従吾会の名前の由来について、「五人が勝手に談じ合ふから従吾会という名を付けた」とある。会のメンバーの1人がいるのであるから、それなりの理由はあるであろうし、実質的な会の内容はそうであろう。



米山が通っていた映雪舎で使われていた論語の教科書

先ごろ、伊東圭一郎『東海三州の人物』（静岡民友新聞社 大正3.9）という書物を目にした。静岡民友新聞に断続的に掲載したものをまとめたものである。犬養毅、尾崎行雄が題字を寄せている。序文には、大隈重信、山路愛山など錚々たる人物が何人か名を連ねている。そのなかに、通一遍でない角田浩々歌客のものもある。この著者は、角田とは親しく、従吾会のことを直接熱っぽく語られたものであろう。

この書物のなかで、角田、遅塚は、独立の項で取上げられている。米山については、「大阪における静岡県人」「三井三菱系の人物」の項で取上げられている。この角田の項で、従吾会の名前の由来が次のように記されている。「論語の『如不可求 従吾所好』より捻出せるものなるが、従吾の吾は亦五人を意味すと窃にその妙案を誇れり」と。

論語のこの句には、上の句がある。これをも含めて見てみる。

◎角田氏は現専賣局長櫻井鐵太郎、ビルブローカー齋藤峯三郎、三井銀行専務取締役米山梅吉と共に舊沼津中學の俊才にて二十四年東都に出て、福澤先生の慶應義塾に入りたり。◎當時彼は米山と同じ下宿屋に煙り、その一軒隣には同郷の宿屋樓上、熾んに氣を吐けり。彼等は是れを従吾會と呼ぶ。

◎従吾會は論語の『如不可求 従吾所好』より捻出せるものなるが、従吾の吾は亦た五人を意味すと窃に其妙案を誇れり、今も時々會合して牛鍋を突つく。

◎而して此五人者中角田は文藝批評家として遅塚は小説家として著聞し、又た石川は新聞界に於て米山氏は實業界に於て共に優秀の地歩を占むるに獨り稲村の名、未だ世間に廣く知られず、彼は國學院の出身、現に山城丹波市なる天理教の中學校に教鞭を執り、新体詩は其尤も得意とする所也。



論語の述而第七のなかに、「子曰く、富にして求可くんば、執鞭の士と雖ども、吾も亦、之を爲さん。如し求可からずんば、吾が好む所に従はん」とある（吉田賢抗『論語』新釈漢文体系 明治書院 による）。

同書によれば、好所というのは、単なる好きな生き方を指すのではなく、理想の生活すなわち学問を楽しむ生活（孔子の好むところは学問）だとする。また、執鞭の士というのは、足輕、賤しい職務、王侯の行列の先払（道行く人を避けさせる役目）とある。なお、岩波文庫の金谷治『論語』では、執鞭には行路の警備員と市場の監督との二種があるが、ここでは後者だとする。

ところで、渋沢栄一は 論語など中国の典籍についての造詣が深かった。その澁沢の著書に『論語と算盤』がある。少し長いが、その解説を引用してみる。

（孔子が）普通には、富貴を賤しんだ言葉のように解釈されておるが、今正当の見地からこれを解釈すれば、句中富貴を賤しんだというようなことは、一つも見当たらないのである、富を求め得られたなら、卑しい執鞭の人になってもよいというのは、正道仁義を行って富を得られるならばということである、すなわち「正しい道を踏んで」という句がこの言葉の裏面に存在しておることに注意せねばならぬ、しかし下半句は正当の方法をもって富を得られぬならば、いつまでも富に恋々としておることはない、奸悪の手段を施してまでも富を積まんとするよりも、むしろ貧賤に甘んじて道を行うほうが良いとの意である、ゆえに、道に適せぬ富は思い切るがよいが、必ずしも好んで貧賤におれとは言っていない、今この上下二句を約言すれば、正当の道を踏んで得らるるならば、執鞭の士となってもよいから富を積み、しかしながら不正当の手段を取るくらいならむしろ貧賤におれということで、やはりこの言葉の半面には「正しい方法」ということが潜んでおることを忘れてはならぬ

それはそれとして、米山の処世をみて、財を蓄えようという気が全くなかったと思われる。米山の好所は、社会、世の中に対する奉仕だったであろう。

『東海三州の人物』より

米山梅吉記念館秋季例祭

お知らせ

日 時 平成24年9月15日(土) 午後2時～
場 所 米山梅吉記念館ホール
新幹線三島駅よりタクシー5分 東名沼津ICより20分
内 容 例 祭
講 演 〔講師〕渡辺玉枝氏(アルピニスト)
(2012年5月エベレスト世界女性最年長登頂記録更新)
〔演題〕「私の登った外国の山々」
アトラクション
ひとり語り 大塚良重氏(女優)
(NHK連続テレビ小説、映画、CM等で活躍中)
懇親会 講演者、参加者と一緒に懇親 登録料無料
多くの皆様のご来館をお待ち申し上げます。

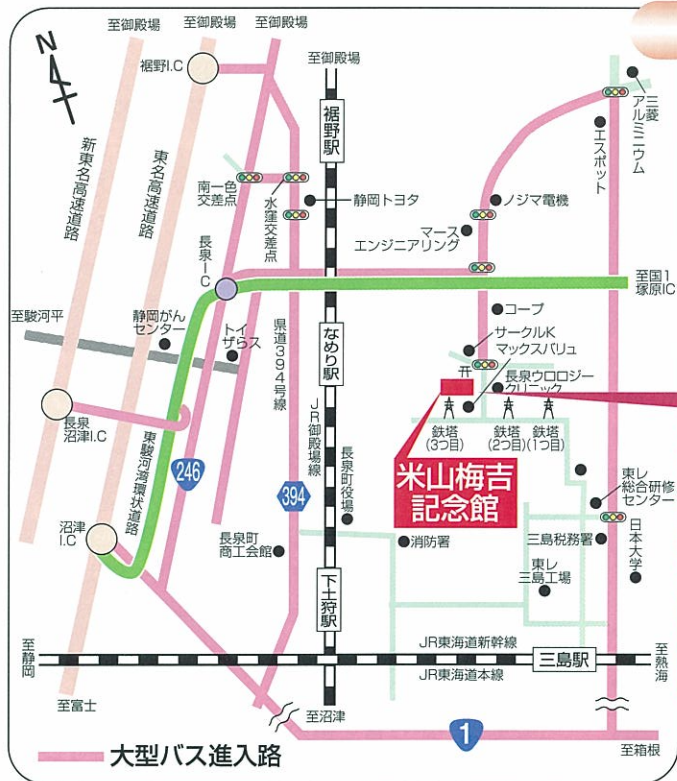
米山梅吉記念館のご案内

● 開館時間 ●

午前10時～午後4時

● 休 館 日 ●

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 20

発行日 平成24年8月10日
発行者 公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL: <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail: yumh@ai.tnc.ne.jp
印刷 フタバ印刷株式会社